

報告

臨地実習における学生の看護倫理に関する体験

宮里智子、大川嶺子、賀数いづみ、西平朋子、牧内 忍、伊良波理絵

目的：学生の臨地実習における看護倫理に関する体験を明らかにし、その特徴を検討することをとおして、看護倫理教育で用いられる事例などの教材開発への示唆を得ることを目的とする。

方法：研究協力者は、看護系大学1施設において、3年生の臨地実習を終了し、協力の得られた23人である。臨地実習における看護倫理に関する体験についてグループインタビューを行い、質的帰納的に分析した。

結果：学生の臨地実習における看護倫理に関する体験は【信頼関係を築くために必要だとは思いますが、自分の個人的な情報を患者に伝えることについて迷う】、【学生としての責任と能力を自覚しているため、患者の家族からの期待に戸惑う】、【患者の尊厳の尊重を考えて判断をしたが、自分の判断と異なる看護師の判断や施設の状況に直面し戸惑う】、【患者の発達段階や性別に応じた尊厳を尊重した対応が出来ず、どのように対応すればよかったのかと疑問に思う】、【信頼関係を築けているからこそ寄せられた患者の好意を断ることができず困る】、【患児へ贈り物をする事は、平等な看護を提供するといえるのか悩む】、【受け持ち患者以外の患者から頼まれごとをされ困る】、【学ぶ者としての思いと看護者としての思いが対立しどう行動すればよいのか悩む】の8つの体験であった。

結論：臨地実習における学生の看護倫理に関する体験の特徴は、学生が看護者としてケアを行う立場であるときと、学習者と看護者のふたつの立場が同時に存在したときの2つに大別されることであり、この体験の特徴をふまえた教材作りを検討する必要があることが示唆された。

キーワード：看護学生、看護倫理、臨地実習、体験

I. はじめに

現代社会においては、患者権利意識が高まり、また、価値観も複雑・多様化しており、医療者には倫理的な判断能力や態度が求められている。患者の療養生活に身近に関わる看護師も様々な倫理的問題に直面し、悩んでいる(岡谷, 1999)。岩本ら(2006)は、大学病院で勤務する看護師が体験する倫理的問題について、身体抑制や薬剤による鎮痛、インフォームド・コンセントなどの頻度が高いと報告している。また、多くの看護師は、倫理に関する知識に自信が乏しく、倫理教育の必要性があると認識しており(岩本ら, 2006)、今後、看護師の倫理的視点を育む教育の必要性がますます高くなると言える。

一方、看護基礎教育においては、看護基礎教育の充実に関する検討会にて、看護倫理が充実すべき教育内容として明示された(厚生労働省,

2007)。小林(2007)は、「生命倫理」を看護教育の中で教えていく場合には、発生した倫理的トラブルに対して的確で実際的な行動がとれるような具体的な事例を示しながら対処方法を共に考えていく授業形態が必要であると述べている。看護倫理教育については、教育方法の確立が十分ではない(大西, 2005)という指摘や、教材が充実していない(勝山ら, 2010)等の課題はあるものの、臨地実習前後に倫理演習を取り入れ、学生の倫理的感受性を高めるなど、倫理実践を促す教育方法の工夫に関する報告もあり(両羽ら, 2011)、看護倫理教育の充実にむけた取り組みが行われつつある。

A看護系大学看護学部においても、倫理教育を行う正規の科目に加えて、2009年度からは、実習オリエンテーションで看護倫理について、事例を用いたグループワーク等を行っている。また、それぞれの実習科目において、カンファ

レンス等で倫理的問題を取り上げ、指導を行っている。しかし、学生が、実習でどのような看護倫理に関する体験をし、判断や対応に迷っているかについて、実習科目ごとの個別的な体験を超えた共通する体験としては共有されておらず、したがって、グループワーク等の評価についても、十分な検討が行われていない。特に、教材として用いている事例については、学生が判断や対応を考えるために適した内容になっているかは明らかではなく、評価を行う必要がある。事例を評価するにあたり、臨地実習における学生の体験に即した内容かを確認する必要があると考え、まずは、学生の看護倫理に関する体験を明らかにすることが求められる。

先行研究では、学生が臨地実習で体験している看護倫理的課題として、インフォームド・コンセントの形骸化や業務優先の患者対応(真継・宮島, 2008)などが報告されている。また、精神看護学など領域が限定されているものの、学生の体験を明らかにした報告では(押領・佐藤, 2012)、学生の体験は、看護師の体験とほぼ同様のものである。一方で、短期間の実習で患者の個人情報を得ることに対する迷いや(佐藤, 2005)、看護学生だけにと打ち明けられた患者の秘密など(富, 2009)、学生という立場であるがゆえの特異的な体験をしていることも明らかになっており、学生の体験は多岐にわたる。A看護系大学の学生も、特有の体験をしている可能性があり、その体験を明らかにすることは重要であると考えられる。

したがって、今回は、学生の臨地実習における看護倫理に関する体験を明らかにし、その特徴を検討することを通して、看護倫理教育で用いられる事例などの教材開発への示唆を得ることを目的とする。

II. 方法

1. 学習レディネスと臨地実習および施設の概要

A看護系大学看護学部では、学生は、1年生の必修科目である看護専門職論Ⅰの中で、日本看護協会の「看護者の倫理綱領(2003)」やサラ・J・フライの倫理原則について講義を受け、看護職者に倫理観が求められるのはなぜかという視点で看護倫理について学んでいる。4年生では、必修科目である医療と倫理の中で、倫理的問題を法的側面からとらえ、望ましい行動がとれるための倫理的基盤について学習している。また、臨地実習前のオリエンテーションにおいて、看護倫理について学ぶ機会がある。まず、1年生の早期体験実習前に、看護倫理に基づいた行動を具体的レベルで示した「実習の心得」について説明を受ける。早期体験実習は、学生が医療施設や福祉施設、市町村役場などに分かれ、看護役割モデルとなる看護職者の仕事を観察し、看護職者に求められる能力について学ぶ実習であるため、看護倫理についても、授業や実習オリエンテーションで学んだことを、看護役割モデルをとおして理解することをねらっている。次に、2年生および3年生の臨地実習前には、教員が作成した事例を用いて、看護倫理的な問題と適切な対応について検討し、具体的な行動を考え出している。2年生の臨地実習では、医療・福祉施設、市町村役場、保育所などの多様な場で、発達段階に応じた疾病の予防などに向けた生活支援の方法を学ぶとともに、患者ひとりを受け持ち、対象に必要な基本的な看護技術を修得する。3年生の臨地実習では、医療施設において、健康を障害された人を一人受け持ち、健康の回復や疾病増悪の予防に向けた看護の方法を学ぶ。看護倫理的課題に直面することが多いことが考えられこの段階で、学生が自ら判断し、行動できることがねらいとなっている。

2. 研究協力者

A看護系大学看護学部において、3年生の臨地実習を終了した80人のうち、協力の得られた23人に「臨地実習における看護倫理に関する体験」についてグループインタビューを行った。グループメンバーは、学生が指定したインタビューの希望日時に集まった学生で構成されており、4つのグループに分けられた。

3. データ収集

学生のグループごとに、半構造化された質問紙を用いてグループインタビューを行った。グループインタビューは、対象者のプレッシャーが少ない、グループメンバーの発言に刺激されて、自発的な発言が促されるなどのメリットがある一方で、メンバーの選び方が偏るとバイアスが生じやすい、他者の意見に引きずられることがあるなどのデメリットもある。今回は、看護倫理に関する体験という繊細な体験を引き出すため、対象者がプレッシャーを感じたり、発言を躊躇したりすることも考えられた。したがって、より楽な気持ちで、自由に表現できるようにグループインタビューを採用した。メンバーの偏りについては、インタビューのグループメンバーと3年生の臨地実習グループメンバーとの重なりがないかどうかを把握したうえで、インタビューを実施した。

調査内容は、1年生から3年生までの実習を振り返り、「行われている、あるいは、自分が行った看護ケアについて、看護倫理的にこれで良いのかと思ったり、どのように行動すればよいか迷ったり、困ったりしたこと」、「看護学生として正しいと考える判断と異なる判断に直面した体験」、「看護倫理的に、看護学生として、正しい行為だったのかと思うこと」とした。インタビュー回数は1回で、インタビュー時間は1時間程度であった。回答内容は、研究協力者の同意を得てICレコーダーに録音し、逐語録とした。

4. データ分析

逐語録から「看護倫理に関する体験」に注目して、重要と思われる発言を取り出し、同じ内容の体験を前後の文脈を検討してまとめ、要約し、分析対象の体験として、内容を表すラベルをつけた。その後、類似する体験をひとつのまとまりにし、まとまりごとに体験を精読し、つまりどのような体験であったかを検討して、看護倫理に関する体験を見いだした。体験を見いだすプロセスにおいて、体験が看護倫理に沿った内容であるかを確認するために、体験と日本看護協会の「看護者の倫理綱領(2003)」とを照らし合わせながら分析を進めた。

5. 倫理的配慮

研究者が研究協力者の教員であることから、強制力が働かないように十分な配慮を行った。具体的には、研究協力者のリクルートは、臨地実習の成績評価が出たあとに実施した。大学内の掲示板に研究協力者募集のポスターを掲示し、関心のある者を対象に、研究に関する説明会を開催し、研究の趣旨、研究への協力は自由意志であるほか、語られた内容を成績評価には用いない、インタビューは3年次の実習指導を担当していない教員が行うなどについて説明した。説明会后に、協力する者は名乗り出てもらい、口頭と文書で同意を得た。本研究は、沖縄県立看護大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号13017)。

Ⅲ. 結果

1. 研究協力者の概要

23人の学生を、希望した日時に基づいて4人～9人で構成される4つのグループ分け、インタビューを実施した。インタビューグループで、3年生の臨地実習で同じグループだった学生の人数は、最大で2人であった。

2. 看護倫理に関する学生の体験

逐語録を分析した結果、16の分析対象の体験にまとめられた。さらに、類似する体験をまとりにした結果、8のまとりになった。まとりごとに体験を精読し、つまりどのような体験であったかを検討して、看護倫理に関する体験を見だし記述した(表1)。以下、分析対象の体験は「」、ラベルは< >、看護倫理に関する体験は【】で示す。

1) 看護倫理に関する体験1【信頼関係を築くために必要だとは思いますが、自分の個人的な情報を患者に伝えることについて迷う】

この体験は、<自分の個人的な情報>、<受け持ち患者が自分の情報を知っていることで感じた怖さ>、<実習が終わった後に患者に会ったときの対応>の3つの分析対象の体験から抽出した。実習で患者を受け持つときは、責任の所在を明確にし、患者との信頼関係を築くため

に、受け持ち患者に学校名や氏名を伝えることは当然のこととして行われているが、学生はそれ以外の私的な情報についても、患者に伝えるべきかどうか迷っていた。また、「患者が意外に近い場所に住んでいて」や「学校に来たらどうしようと思って怖かった」などのように、学校名や氏名を患者が知っており、臨地実習が終わった後も患者と会う可能性があることに戸惑いを感じていた。

2) 看護倫理に関する体験2【学生としての責任と能力を自覚しているため、患者の家族からの期待に戸惑う】

この体験は、<家族が行っている行為をやって欲しいとお願いされて対応に困る>、<学生ひとりで新生児をみていたという対応>、<看護師に間違われて感じた戸惑い>の3つの分析対象の体験から抽出した。学生は、学生としての責任と能力を自覚しているため、患者の家族

表1 看護倫理に関する体験

【看護倫理に関する体験】	分析対象の体験 <ラベル>
1【信頼関係を築くために必要だとは思いますが、自分の個人的な情報を患者に伝えることについて迷う】	<自分の個人的な情報> 患者と親しくなると、どこまで自分の個人的な情報を話していいのかと思う。出身地などを聞いてくるので、住んでいる市ぐらいは話す。本当は、仲良くなりたい思いはある。実習の終わり頃に聞かれるといいが、始まりの頃に聞かれると関係性みたいなものが気まづくなる。
	<受け持ち患者が自分の情報を知っていることで感じた怖さ> 受け持ち患者が、精神疾患を持っていて妄想が強い人だった。私を名前で呼んでいた。学校名も知っていて、よく近くまで行くと言っていたので、学校に来たらどうしようと思って怖かった。
	<実習が終わった後に患者に会ったときの対応> 患者が意外に近い場所に住んでいて、えっと思ったことがある。嫌ではないが、会ったときに、患者と学生という立場ではないと思うと、どんな対応をしたらいいのか。会ったときに知らないふりをするのか、それともこんにちはと挨拶だけするのか。
2【学生としての責任と能力を自覚しているため、患者の家族からの期待に戸惑う】	<家族が行っている行為をやって欲しいとお願いされて対応に困る> 学生は行えない行為だが、家族は行える行為があったときに、どうしようと思う。例えば、普段から家族が車いす移乗をしている患者の場合、家族から「車いすに移してほしい」と言われ、私はできないけれど、家族は「自分もやっているからできるでしょう」と言った。困る。家族がやっていることを学生ができないときに、どうしたらいいのか分からない。
	<学生ひとりで新生児をみていたという対応> 受け持ちの患者が、授乳前に「トイレ行きたいけど、今行ったら1人にしちゃうから、授乳が終わって、寝かして、新生児室に預けてから行く」と言っていた。そこで、「私が見ているので先に行ってください」と言ってしまった。先生がそばにいるわけでもなくて、ベッドサイドに私ひとりだけがいたので、その対応でよかったのかなと気になる。その対応の仕方で大丈夫だったのかなど。何も起こらなかったからよかった。
	<看護師に間違われて感じた戸惑い> 面会に来る家族の方が、私たちに話しかけるときがある。「〇〇さんの部屋はどこですか」とか「お願いしたいんですけど」と言われる。家族にとっては、私たちも看護師なので、どう対応すればいいのかと戸惑った。

【看護倫理に関する体験】	分析対象の体験 ＜ラベル＞
3【患者の尊厳の尊重を考えて判断したが、自分の判断と異なる看護師の判断や施設の状況に直面し戸惑う】	<p>＜自分の考えに反して病院のやりかたに合わせた自分＞ 患者は歯磨きとか食事を自分でできる人だったので、ベッド上ではなく、洗面所に移動したり座位を取らせたりと、少しでもそうしたかったが、看護師がいなくて声を掛けられなかった。体重の重い人で、ひとりでは動かさなくて、患者も、もう「ここでいいよ」と言って。看護師もベッドで歯磨きをしていた。先生がいるときは一緒にできるが、先生もいなかったの、その病院のやり方でやった。本当はやりたいけど、でも、もう病院に合わせるかと思った。</p> <p>＜自分の考えとは異なる看護師の考えとの直面＞ 看護師に「お風呂の様子を観察してみたら」と言われて、お風呂場にひとりで入れられた。でも、介助するわけでもないし、ずっと見ているのかなと思ひ、お風呂場ですっとおろおろしていた。こんなときはどうしたらいいのか分からなかった。看護師は、患者がどれぐらい自分で出来るのかを把握してほしかったらしい。でも、患者の入浴の状況について情報はあるのに、見ていてもいいのかどうなのか悩む。見えても全然問題ない、相手も見られて嫌じゃないような場面であれば、私も見たいと思うけれど、入浴などはできる限り見てほしくないだろうと思う。</p>
4【患者の発達段階や性別に応じた尊厳を尊重した対応が出来ず、どのように対応すればよかったのかと疑問に思う】	<p>＜子どもの尊厳を尊重した対応が不十分＞ 子どもを呼び捨てで、友達を呼ぶような感覚で呼んでいた。子どもだからといっても、ちゃんと「○○君」とか「○○ちゃん」と呼ぶのが当たり前だが、できていなかった。</p> <p>＜男子学生が授乳室に入り感じた戸惑い＞ 受け持ちのお母さんに「いいよ」と言われて授乳室に入ったのですが、他のお母さんがいるときに、男子学生の私が入っていくときにどんな顔をしていいのか、どこに立っていればいいのか。母乳が出ていることを聞くにも、「おっぱい出ていますか」と聞いていいのかということがあった。</p>
5【信頼関係を築けているからこそ寄せられた患者の好意を断ることができず困る】	<p>＜患者からの心付け＞ 病室から出ない患者だったが、実習最終日が近いことを伝えると、急に「お金を下ろしたい」と言われて、看護師に報告をして、病院の中にあるATMまで車いす介助をした。そしたら、自分で立てる患者なのに、「立てないから、暗証番号言うので押して」と言われて、カードと通帳を渡された。暗証番号と通帳があったら、お金は全額引き出すことができる。私は「ATMを使えないんです」と嘘をついた。そして、患者に引き出してもらった。その後、患者は、弁当や雑誌を「あなたのさ」と言って買おうとしたり、買った缶コーヒーを渡したりと、どんなに断っても、断りきれない。</p> <p>＜患者から寄せられた好意＞ 「どんなバイトをしているの」と聞かれて、塾講師のバイトをしていることを伝えると、「孫の家庭教師をして欲しい」と言われた。断ったが、「学校の近くに住んでいるので、見かけたら声をかける」と言われ、電話番号を聞かれたので答えられないことを伝えると、患者のほうから電話番号を渡そうとしてきて、とても困った。</p>
6【患児へ贈り物をするとは平等な看護を提供するといえるのか悩む】	<p>＜患児への購入した贈り物＞ 採血などで泣く子だったが、シールを渡したらとっても喜ぶ子で、看護師さんがシールをあけていた。私も、いいのだろうなと思って、お店で買って来たシールを渡した。採血の後に渡したら、その子が喜んだ。でも、学生が実習で行っているのに、勝手に物を渡すのはどうなのか、お金でわざわざ買ってきて、お菓子やまんじゅうは駄目なのに、そういうのはいいのかという話になった。学生はその子のためを思ってやっていることだけど、お金を使うのはいいものか。</p> <p>＜患児への手作りの贈り物＞ 家にあった使わない折り紙をあげた。受け持ちの子だから、感情移入する。愛着が湧く。だから、折り紙を作って行ったら喜ぶかなと思った。差別ではないけれど、その子にだけ何かを渡したりしたら駄目なのか。</p>
7【受け持ち患者以外の患者から頼まれごとをされ困る】	<p>＜受け持ち患者以外の患者との関わり＞ 受け持ち患者と同室の人から水を入れてきてと頼まれた。スリッパを取って、車いすに移して、ベッドあげてなどと頼まれたこともある。ベッドを上げるのは、もしかしたらその体位は駄目かもしれない。そう思ったら、どうしようと思う。「すみません、ちょっと聞いてきます」と言うが、「何で呼ぶ必要があるの。あんたができるでしょ」と言われる。3年生の実習だったから、水分制限があるかもしれないと思いついたが、2年生の実習では、多分思いつかなかったと思う。受け持ち患者以外の患者から名前と顔を覚えられており、「看護師さんには言っていないけど」などと相談された。受け持ち患者じゃないので、病状も分からない状態で、考えだけを聞いてどう発言していいか分からなかった。「そうなんです」と返しても、次の日にはまた同じような話をされた。</p>
8【学ぶ者としての思いと看護者としての思いが対立しどう行動すればよいか悩む】	<p>＜看護学生としての思いと看護者としての思い＞ 患者に不安や病気の知識がどれぐらいあるかを聞きたかったが、患者は、ずっとベッドで横になっていた。家族が面会に来ていたりなのに、私がベッドサイドに行って話をしているのかと思った。でも、実習の時間は限られているし、この時間内で聞かないといけないという焦りもある。患者のことを一番に考えると、もしかしたら、家族がいるときには、そういう話はしたくないし、家族だけの時間を大切にしたいと思っているかもしれない。家族が来る時間も限られている。そう考えると、私が話をしに行っているのかどうか迷った。こういう迷いは、どの実習でもあった。</p>

から、「自分もやっているからできるでしょう」と、家族が行っているケアを代わって欲しいなど、能力の範囲を超える期待をされたときに戸惑っていた。

3) 看護倫理に関する体験3【患者の尊厳の尊重を考慮して判断をしたが、自分の判断と異なる看護師の判断や施設の状況に直面し戸惑う】

この体験は、〈自分の考えに反して病院のやりかたに合わせた自分〉と〈自分の考えとは異なる看護師の考えとの直面〉の2つの分析対象の体験から抽出した。学生は、患者の尊厳の尊重を考慮して判断していたが、「もう病院に合わせるかと思った」などのように、自分の判断と異なる看護師の判断や施設の状況に直面し戸惑っていた。

4) 看護倫理に関する体験4【患者の発達段階や性別に応じた尊厳を尊重した対応が出来ず、どのように対応すればよかったのかと疑問に思う】

この体験は、〈子どもの尊厳を尊重した対応が不十分〉と〈男子学生が授乳室に入り感じた戸惑い〉の2つの分析対象の体験から抽出した。学生は、患者が子どもや異性であったときに、自分の行った対応が十分に患者の尊厳を尊重できていなかったと感じたり、どのような対応をすべきであったのかと疑問を感じたりなど、十分に対応できていなかったと感じていた。

5) 看護倫理に関する体験5【信頼関係を築けているからこそ寄せられた患者の好意を断ることができず困る】

この体験は、〈患者からの心付け〉と〈患者から寄せられた好意〉の2つの分析対象の体験から抽出した。患者を受け持ち、看護過程を展開するプロセスにおいて、患者と学生の間で信頼関係が築かれ、それが、患者の学生に対する好意に結びついている。しかし、学生は、患者からの好意に対して、対応に困っていた。

6) 看護倫理に関する体験6【患児へ贈り物をするのは、平等な看護を提供するといえるのか悩む】

この体験は、〈患児への購入した贈り物〉と〈患児への手作りの贈り物〉の2つの分析対象の体験から抽出した。受け持ちをした患児に何かしたいという思いが、贈り物をするという行動を起こさせているが、それは、その患児だけを特別扱いしていることになるのではないかという思いもあり、平等な看護を提供することになるのだろうかという気持ちが揺れていた。贈り物が、購入したものであれば、その気持ちの揺れはいつそう強い。

7) 看護倫理に関する体験7【受け持ち患者以外の患者から頼まれごとをされ困る】

この体験は〈受け持ち患者以外の患者との関わり〉の1つの分析対象の体験から抽出した。学生は受け持ち患者以外の患者については、必要な看護ケアを判断するために必要な情報をもっておらず、自分の責任と能力の範囲を超える状況であることを感じている。しかし、看護者として患者から頼まれたことなどを断ることもできず、困っていた。

8) 看護倫理に関する体験8【学ぶ者としての思いと看護者としての思いが対立しどう行動すればよいのか悩む】

この体験は〈看護学生としての思いと看護者としての思い〉の1つの分析対象の体験から抽出した。学生は「患者に不安や病気の知識がどれくらいあるかを聞いたかった」、「実習の時間は限られている」などのように、これは、学ぶ者として、必要な情報を限られた実習時間のなかで得なければという思いがあった。一方で、看護者として患者にとって一番大事なことは何かを考え、学ぶ者としての思いと看護者としての思いが対立し、悩んでいた。

IV. 考察

本研究の結果、学生の臨地実習における看護倫理に関する体験は【信頼関係を築くために必要だとは思いますが、自分の個人的な情報を患者に伝えることについて迷う】、【学生としての責任と能力を自覚しているため、患者の家族からの期待に戸惑う】、【患者の尊厳の尊重を考えて判断をしたが、自分の判断と異なる看護師の判断や施設の状況に直面し戸惑う】、【患者の発達段階や性別に応じた尊厳を尊重した対応が出来ず、どのように対応すればよかったのかと疑問に思う】、【信頼関係を築けているからこそ寄せられた患者の好意を断ることができず困る】、【患児へ贈り物をするとは、平等な看護を提供するといえるのか悩む】、【受け持ち患者以外の患者から頼まれごとをされ困る】、【学ぶ者としての思いと看護者としての思いが対立しどう行動すればよいのか悩む】が明らかとなった。学生が臨地実習で体験した倫理的問題で着目したものの特徴は、真継・宮島(2008)や富(2009)の報告によると、学生が直接体験したものと、その場に居て間接的に体験したものがある。しかし、本研究で明らかになった体験は、学生が直接体験したものであった。これは、学生が、臨地実習において、自分が行った看護を「これはおかしいのでは」という道徳的感受性でとらえ、自己の看護実践を看護倫理の視点からみつめることに関心が向いていることの現れだと考える。

学生の看護倫理に関する体験をみると、【信頼関係を築くために必要だとは思いますが、自分の個人的な情報を患者に伝えることについて迷う】、【信頼関係を築けているからこそ寄せられた患者の好意を断ることができず困る】は、患者との信頼関係を築いたうえで看護ケアを提供するという、看護者として最も基本的な姿勢を学生が大切にしていることがわかる。一方、学生自身の個人的な情報を示すことや築いた信頼

関係に対する報酬とも言えるような好意を受け取ることを患者から求められ、断ることが信頼関係を損ないかねない状況におかれたときに、どのように対応すればよいか迷っている。つまり、患者との信頼関係と学生自身の対応との間で判断が揺れ動く体験をしている。【学生としての責任と能力を自覚しているため、患者の家族からの期待に戸惑う】や【受け持ち患者以外の患者から頼まれごとをされ困る】は、看護者の一員としての責任と責務という点から、学生として、自己の責任と能力では対応できない状況が起こったときに困った体験である。【患者の尊厳の尊重を考えて判断をしたが、自分の判断と異なる看護師の判断や施設の状況に直面し戸惑う】は、患者の尊厳の尊重についての判断が学生と看護師との間で異なり、学生が戸惑っているのがわかる。これは、免許をもち自己の責任と能力では対応できない状況や、学ぶ立場であるがゆえに看護師の指示に従わざるをえない学生の戸惑いの体験といえる。【患者の発達段階や性別に応じた尊厳を尊重した対応が出来ず、どのように対応すればよかったのかと疑問に思う】と【患児へ贈り物をするとは、平等な看護を提供するといえるのか悩む】は、患者の発達段階や性別を問わず、患者の尊厳の尊重や平等な看護の提供は重要だと考える学生の思いの現れであり、看護専門職者としてふさわしい対応を模索する体験といえる。【学ぶ者としての思いと看護者としての思いが対立しどう行動すればよいのか悩む】は、実習をしている学生のなかに、学ぶ者と看護者というふたつの立場が同時に存在し、どちらの思いを優先させればよいのか悩んでいる。したがって、学習者と看護者というふたつの立場が同時に存在したときの体験といえる。以上のことから、臨地実習における学生の看護倫理に関する体験の特徴は、学生が看護者としてケアを行う立場であるときと、学習者と看護者というふたつの立場が

同時に存在したときのふたつに大別されることが特徴であるといえる。

今後は、現在、看護倫理教育に使用している教材が、学生が看護者としてケアを行う立場であるときと、学習者と看護者というふたつの立場が同時に存在したときの2つの体験に即しているかを評価し、事例の修正や新たな事例の作成に取り組みたい。

V. 結論

1. 学生の臨地実習における看護倫理に関する体験として、8つの体験が抽出された。

2. 臨地実習における学生の看護倫理に関する体験の特徴は、学生が看護者としてケアを行う立場であるときと、学習者と看護者というふたつの立場が同時に存在したときの2つに大別されることであり、この体験の特徴をふまえた教材作りを検討する必要があることが示唆された。

文献

岩本幹子, 溝部佳代, 高波澄子. (2006). 大学病院において看護師が体験する倫理的問題, 日本看護学教育学会誌, 16(1), 1-12.

勝山貴美子, 勝原裕美子, 星和美, 鎌田佳奈美, ウィリアムソン彰子. (2010). 過去5年間の倫理に関する研究の特徴と今後の課題, 日本看護倫理学会誌, 2(1), 77-86.

小林亜津子. (2007). 看護のための生命倫理. ナカニシヤ出版. 東京.

厚生労働省. (2007). 護基礎教育の充実に関する検討会報告書, 厚労省検討会報告書.

真継和子, 宮島朝子. (2008). 学生が捉えた倫理的課題と看護者に求める倫理観, 京都大学医学部保健学科紀要, 4, 39-44.

岡谷恵. (1999). 看護業務上の倫理的問題に対する看護職者の認識, 看護, 51(2), 26-31.

大西香代子. (2005). 倫理的な能力をどうはぐ

くむか. 基礎教育の立場から, 日本看護学教育学会誌, 14(3), 48-53.

押領司民, 佐藤みつこ. (2012). 看護学生が精神看護学実習で体験した倫理的課題と学び, 看護教育研究学会誌, 4(2), 23-29.

両羽美穂子, 松下光子, 北山三津子. (2011). 学士課程における看護学実習を通じた倫理的対応に関する教育の方法, 岐阜県立看護大学紀要, 11(1), 55-62.

佐藤友美. (2005). 看護学生が捉えた倫理問題基礎看護学実習の体験の中で, 日本看護科学会誌, 25(3), 92-95.

富律子. (2009). 看護学生が成人看護学実習で体験した倫理的問題と状況認識, 川崎市立看護短期大学紀要, 14(1), 109-115.

Experience Regarding Nursing Ethics of Students on Nursing Practicum

Tomoko Miyazato, Mineko Okawa, Izumi Kakazu, Tomoko Nisihira, Shinobu Makiuchi,
Rie Irah

Purpose:

To identify experiences regarding nursing ethics of students during nursing practicum and discuss the characteristics of such experiences, in order to gain insights into developing educational material in the form of nursing ethics case studies, among others.

Method:

A total of 23 research collaborators, who have completed their third year practice work in a nursing department facility of a nursing university, agreed to participate in the study. A group interview on their experiences regarding nursing ethics during practice work was conducted, and the information collected was analyzed qualitatively and inductively.

Result:

Students' experiences regarding nursing ethics during nursing practicum were the following eight: 1) I am hesitant to give patients my personal information even though I know it is necessary to build rapport. 2) Because I realize my responsibility and ability as a student, I am perplexed by the expectation patients' families have on me. 3) I made decisions that respected patients' integrity, but I am perplexed by decisions made by other nurses or the situation of the facility that are not in alignment with my decisions. 4) I was not able to treat patients in a way that respected their integrity based on their developmental stage and sex, and question myself as to what I should have done. 5) It is difficult to say no to patients' affection because it grows out of rapport. 6) I find it difficult to decide whether or not giving a gift to an affected infant is a fair act of nursing. 7) I am bewildered by requests made by patients that are not under my responsibility.

8) I find it difficult to resolve the conflict between the student and the nurse in me.

Conclusion:

The study on experiences regarding nursing ethics of students during nursing practicum identified two major types: 1) the student assuming the role of the nurse to provide care, and 2) the role of the student and the nurse co-existing as one. This suggests a need to consider developing educational material that corresponds to each type.

Key words: Nursing student, nursing ethics, nursing practicum, experience